東京言語研究所 オンライン 公開講座

地震、英語、研究倫理：その建前と本音

＜講師＞ ロバート・ゲラー氏

（東京大学名誉教授／地震学）

＜日時＞2021 年 2 月 27 日（土）

14：00～17：00

※途中小休憩あり

講師略歴

1952 年アメリカ　ニューヨーク市生まれ。
1977 年カリフォルニア工科大学大学院地球惑星科学研究科博士課程修了。Ph.D.(理学博士)カリフォルニア工科大学研究科研究員、スタンフォード大学助教授を経て、1984 年より東京大学理学部（当時）助教授、1999 年より同大学大学院理学系研究科教授。東京大学で初めての任期なし外国人教員。2017 年に定年退職、東京大学名誉教授。所属学会：日本地球惑星科学連合フェロー。
著書：「日本人は知らない『地震予知』の正体」（双葉社）「ゲラーさん、ニッポンに物申す」（東京堂出版）

＜参加費＞2,000 円（税込） ※事前振込制　申込開始 1/22(金)より

＜申込み＞「ホームページ申込フォーム」より

＜オンライン使用媒体＞ ZOOM

＜受講の流れ＞

1. 申込み
2. 受講料の振込み／2月22日（月）締切
3. ZOOM 視聴 URL を受け取る／2月24日（水）

＜注意事項＞

・オンライン講義の録画はできません。本番の視聴のみできます。

・一度お振込になった受講料は、いかなる場合も返金いたしません。

受講料の振込先
○郵便振替　00110-8-43537
（名義）財団法人 ラボ国際交流センター

○銀行振込　りそな銀行〈銀行コード番号0010〉
新都心営業部支店〈支店番号675〉
普通預金　口座番号6726641
（名義）公益財団法人ラボ国際交流センター
ザイ）ラボコクサイコウリュウセンター

問合せ先

公益財団法人 ラボ国際交流センター 東京言語研究所

〒169-0072 新宿区大久保 1-3-21 新宿TXビル2階
TEL：03－6233－0631　E-mai :info@tokyo-gengo.gr.jp
ホームページ：http://www.tokyo-gengo.gr.jp/

講演要旨は裏面へ

【講義要旨】

人生と言語の面白さは各論にあります。本講演では幅広い事例をご紹介して、その面白さを皆さんと共有したいと考えています。参加者のうち特に文系の方々は、私がお話しする理系の現状にビックリしていただけるのではないかと期待しています。

まず、「地震予知」（英語では earthquake prediction）を考えてみましょう。地震はもちろん恐ろしい現象ですから、言うまでもなく、（私を含めて）だれもが、地震を予知できるようになることを望んでいます。しかし、この希望は「科学的根拠に基づいて正確に予知ができるのであれば」といった条件が満たされていることを（明示はしなくても）暗黙の前提にしているはずです。

“Is earthquake prediction possible?”「地震予知は可能か」は単純そのものの問いのように思われがちですが、蓋をあけてみると、簡単ではないことが分かります。適切な答えは “That depends on the definition of ‘earthquake prediction’”というものです。詳細は講演でご説明しますが、結論は、実際に社会のためになりうるような地震予知は現時点ではできない、ということになります。しかし、残念ながら、国内外の一部の研究者は、まるで国会答弁のように、巧みに言葉を選んで一般人の期待を（過度に）誘導することによって、研究費を獲得しています。要するに、日本でも海外でも、地震学分野にかぎらず、研究者は、自分の都合に合わせて、100%真実と 100%嘘の間にある境界領域に（ときには無理があるとわかっていながら）踏み込んでしまうことがよくあるのです。そうした例をいくつか紹介します。

このように、理系の人間が話すときには、それ以外の人たちの場合と同様に、立場と思惑があるものです。したがって、理系の専門家の話を受け身の姿勢で聞くのではなく、アクティブ・リスニングが必要になります。

研究倫理(research ethics)は近年社会的に話題になっています。特に 2014 年の STAP 細胞研究不正騒動後には、メディアでも頻繁に不正の事例が取り上げられました。その中には、文系の人たちには思いもよらぬ問題もあります。例えば、論文の「著者」(author)となる資格を有するのは誰なのでしょうか。文系の皆さんは「ペンを手にして文章を書いた（近年であれば、キーボードを叩いて打ち込んだ）人に決まっているでしょう」とお答えになるかもしれませんが、理系では10名以上の共著者がいる論文は決してまれではありません。したがって、誰が著者になるべきなのかは意外に複雑な問題なのです。この講演ではこのような事例をできるだけ多く紹介していきます。

日本では英語についていろいろなステレオタイプが独り歩きしています。「日本語の表現には婉曲的なものが多いのに対して、英語の表現は「直球」ばかりだ」というのもその例です。しかし、言語は人間の特性を反映するものであり、地球上どこでも人間は同類の動物なのですから、表現したいことがそれほど異なるはずはなく、したがって、表現できることが（表現法は多少違っても）言語間でそれほど大きく異なるはずもありません。事実、英語にも「変化球」的な表現が多々ある一方で、日本語で「直球」を投げることもできるのです。

それでは、日本人の間に英語についての根強い勘違いがあるのはなぜなのでしょうか？主たる理由は、日本の学習者は英語のごく一部しか学ばないため、母語話者が日常生活でごく普通に使っている表現なのに日本人学習者は知らない、というものが多すぎることだと私は考えています。この講演では多種多様な英語の例（私は「フルスペック英語」と呼んでいます）を紹介して、日本人の誤解の解消に努めたいと思います。